

令和4年度  
佐賀県フィンランド使節団視察報告書



佐賀県議会議員 一ノ瀬 裕子





## 目 次

- 視察概要 . . . P 1
  
- 視察先の概要及び所感等 . . . P 3
  
- 県政への反映について . . . P 27



## ■ 視察概要

### 1. 視察地

---

フィンランド（ヘルシンキ、エスポー、フィスカルス）

### 2. 視察目的

---

住民サービスやデジタルトランスフォーメーション、教育、子育て、エネルギーなど機能的にデザインされたフィンランドの社会システムなどを学び、新たな連携を図り、よりよい佐賀県を創っていく。

### 3. 使節団構成

---

団長	知事	山口 祥義
副団長	政策部長	進 龍太郎
	(株)バイオテックス 代表取締役社長	原田 烈
	田島株式会社 専務取締役	田島 みゆき
	佐賀大学海洋エネルギー研究センター 助教授	森崎 敬史
	(有)畑萬陶苑 常務取締役	畑石 修嗣
	レグナテック(株) ブランドマネージャー	樺島 賢吾
	佐賀大学芸術地域デザイン学部 准教授	三木 悦子
	(株)リトコス 代表	三田 かおり
	224porcelain 代表	辻 諭
	Owatari DESIGN グラフィックデザイナー	大渡 大士
	県議会議員	江口 善紀
	県議会議員	一ノ瀬 裕子

#### 4. 行程（デザイン・まちづくりチーム）

日 程	場 所	訪 問 先 等
10月17日(月)		移動日
10月18日(火)	ヘルシンキ	アールト大学視察 ICEYE視察 佐賀県フィンランド交流大使委嘱式 佐賀県主催夕食会
10月19日(水)	フィスカルス	フィスカルス（工房等）視察
10月20日(木)	ヘルシンキ	ヘルシンキ中央図書館（Oodi）視察
10月21日(金)		移動日

※10月19日、20日はエネルギー分野、まちづくり・デザイン分野の2班に分かれて視察を実施。

##### デザイン・まちづくりチーム

- ・山口 祥義
- ・進 龍太郎
- ・畑石 修嗣
- ・樺島 賢吾
- ・三木 悦子
- ・三田 かおり
- ・辻 諭
- ・大渡 大士
- ・一ノ瀬 裕子

## ■ 視察先の概要及び所感

### 1. 訪問先：アールト大学（10月18日（火）13:30～15:00）

Enter Espoo 社でシニアビジネスアドバイザーを務める清水眞弓氏から、エスポー市の取組みやアールト大学の概要について説明があった。

#### 説明の概要

##### ○エスポー市について

- ・人口約 29 万人（2020 年末時点）。首都ヘルシンキの次に人口が多く、155 カ国から集まってきている国際的な都市であり、平均年齢 37.8 歳と若く、住民の 20%が 15 歳未満となっている。
- ・2015 年、2016 年にオランダの大学がヨーロッパにある 144 の都市を対象に行った調査で、「持続可能な都市」として 1 位を獲得した。
- ・マイクロソフトのフィンランド本社やバイオ燃料等を開発している Neste など大企業が集積したエリアであり、イノベーションの基軸となるような組織が集まっていることから、そこから発されるベンチャー企業が非常に多い。
- ・自治体としてのエスポー市の理念は、トップダウンで何かをまとめていくのではなく、企業の「支え役」になることである。

##### ○アールト大学について

- ・アールト大学は、フィンランドでもトップクラスの 3 つの大学がイノベーションを生むために合併した。フィンランドでは年間約 90 社のスタートアップ企業が生まれており、半数以上がアールト大学出身である。
- ・アールト大学が所有している旧校舎には、起業したばかりのスタートアップ企業が入居しているほか、職業斡旋所や企業のためのコンサルティング窓口、エスポー市 100%出資で海外企業の誘致などを行う Enter Espoo 社などが入居している。
- ・キャンパス内には、フィンランド政府が直営する研究所である VTT（フィンランド国立技術研究所）の本社があり、応用研究が身近に行われている環

境にある。

#### ○エスポー市の取組事例 — city as a service —

エスポー市は「サステイナブルであり、イノベーションを起こせる市でありたい」と考えている。

そのため、市役所職員だけでなく企業と連携しながら、市が持っている学校や病院、講堂を活用して、企業と一緒に新しいものを作ったり、実証実験を行ったりしている。

#### ①「Iso Omena サービスセンター」

エスポー市はショッピングセンターのワンフロアを借り、子育て支援を行うネウボラや音楽スタジオ、アートギャラリー、中毒症や精神病のカウンセリングを行う場所など約 16 のサービスを設けている。

この施設は働く人も利用しやすいように、閉館時間が 21 時頃となっている。

#### ②「School as a Service (SaaS)」

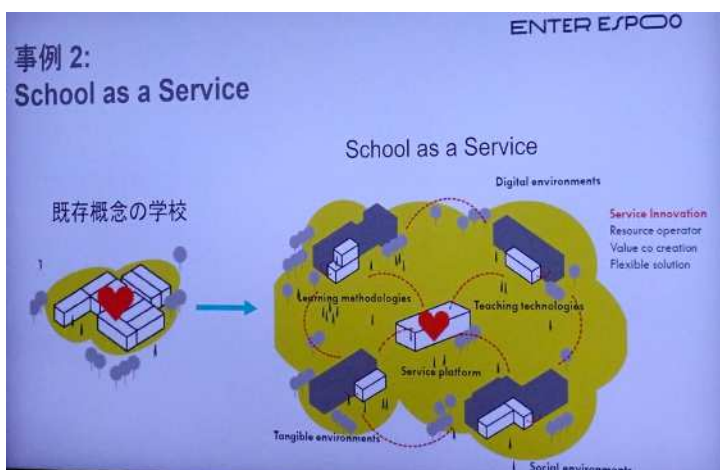
大学のキャンパスを使って、高校の学びを行う取組みを行っている。

具体的には、高校生が、科学の授業の時間はアールト大学の科学の実験室に移動し、そこで授業を受けたり、体育の時間は、アールト大学の体育館を利用したり、また、給食の時間は、アールト大学の食堂を利用したりしている。

校舎の建て替えをしなければならない際に、当該取組みを行ったことで、建て替えに係る費用や CO2 の削減を実現することができた。また、アールト大学の使用していない場所を他の方に利用してもらうことで、大学としても収入（賃貸料）が入り、利用する高校生に対しても大学の魅力を PR する機会となっている。

さらに、利用する高校生も将来の興味や見通しがたちやすくなるといったメリットがあるため、この取組みを行っている高校への志願者が非常に多く、人気の取組みとなっている。





### ③スマートシティ関連のプロジェクト「Lux Turrim 5G ecosystem」

広い倉庫と通信機器メーカーのNOKIAの本社がある広いエリアに、ドローンの基地局やカメラ、スクリーン等を搭載したスマートポールを19本立て、それを利用し、実証実験を行っている。これらのスマートポールは、NOKIAだけが利用できる訳ではなく、様々な海外企業も自らの商品の実験が可能となっている。

エネルギーやコネクティビティ、モビリティなどあらゆる事象が複雑に絡み合っ成り立つスマートシティの実現に向け、当該エリアを企業のための実証実験のエリアにする取組みを行っている。

#### 質疑応答、意見等

##### ○ Enter Espoo 社 清水氏意見

・フィンランドの企業は、日本の企業のように全て自前で完結させようとせず、自社を補完してくれる企業など数多くパートナーを作り、クラスターを作っていくという考えがある。そのため、イノベーションが起こりやすい。

・日本の企業は、その場で結論を出さず、「持ち帰り、検討します」と回答するが、海外の企業は、協力できる部分とそうでない部分その場で明確に断言する。スタートアップ企業にとって待たされることは一番困ることであり、次

がない場合はその場で断言してもらうことはありがたい。

その点が、日本の企業と決定的に違う。スタートアップ企業にとっては早い決断が求められる。

### ○ 質疑応答等

・小学校に通っている子どもの校舎が建て替えのため、現在、アールト大学の校舎で授業を行っている。自宅まで距離があるが、様々な公共交通機関を利用して、子どもなりに冒険しながらで、帰宅してくる。どういったルートで帰宅したか話す子どもの目は輝いており、良い経験になっていると思う。(Enter Espoo 社 清水氏)

→ 公共交通機関を利用するきっかけとなる非常に良い取り組みだと思う。また、子どもの自立心を促す良いきっかけにもなる。

・ 企業がエスポー市に集積してくる要因として、一番大きい要因は何か？

→ 大学と VTT による長年の知見や研究の実績が大きい要因だと思う。また、ベンチャー企業の買収も多く行われている。(Enter Espoo 社 清水氏)

・ フィンランドの学生は何事にもチャレンジ性があり、柔軟性を持ち合わせた学生のイメージがあるが、それについてどう思うか。

→ 学生のイメージについて、そのように非常に感じている。

アールト大学の名物教授が行うプログラムに、様々な学部の学生からなるチームが、企業から与えられた課題を 10 か月間で実施するプログラムがある。

学生が行うプログラムであり、必ずしも企業が提示する課題を成し遂げるとは限らないが、そこに集まる企業は、学生ならではの新しい発想やそこから生まれる学生のアイデアに注目している。

当該教授は、「失敗するなら、早く失敗して、その失敗から早く次に進んだ方がよい」という話をよくしており、そのことから学生は失敗を恐れずに色々なことに挑戦し、開発を行っている。(Enter Espoo 社 清水氏)



## 所 感

アールト大学では、いかにしてイノベーションを創出しているのか、その一端をご説明いただいたが、大学や学生、地元エスパー市、そして企業や研究所が参画し、それぞれが役割を果たしながら、きっかけ作りから資金調達に至るまで、イノベーションを創出し支援していく流れが、見事にデザインされていることに目を見開かされる思いがした。

その核となる存在がアールト大学である。公立の大学として「一流の研究・芸術・教育を通じて、フィンランドのイノベーション能力を強化」するという国家的使命を背負い、ヘルシンキ工科大学、ヘルシンキ経済大学、ヘルシンキ芸術デザイン大学の3つを統合し、科学、工学、ビジネス、芸術の専門性の垣根を無くし、密接に連携させることによってイノベーションの創出に寄与するアカデミックな拠点として2010年に設立されたが、ご説明では「イノベーション、アントレプレナー、スタートアップ」、といった単語が繰り返し出て、大学の至るところにスタートアップの意識と文化が根付いていることを感じた。また、事前リサーチの際に得た、25歳以下のフィンランド人の5分の1が「3年以内に会社をはじめよう」と考えているとの情報を裏付けるような活気も伝わってきた。

そもそもフィンランドは、日本などの多くの国と同様、行政や大企業志向が強かったが、リーマンショックやスマートフォンの台頭によるノキア没落を経験し、大企業志向が薄まった。(ノキアは世界で最も売れている携帯電話ブランドだったが、2007年、Apple社がiPhoneを発売した後、たった6年で市場価値は90%下落し、2013年には、携帯電話事業はMicrosoftに買収されてしまった。)

この経済構造の変化を目の当たりにしたフィンランドの人々、また実際に解雇されたフィンランドの人々は、大企業によらず、ノキアで培ったスキルを生かしてスタートアップを手掛け始めた。ここから一気にスタートアップ文化は醸成されていったのである。

世の情勢や人々の新しいニーズに応えるべく、アールト大学は機動性のある取組みを展開し、大学の機能を成長させてきた。学生は、失敗しても許されるという文化の中で、企業や自治体が抱える課題の解決に向け必要とされるイノベーションを創出し、芽吹いた後は資金調達の支援を得るなど多様なフェーズで多様な支援を受けながら起業家として独立している。独立後もマッチング支援によって国内外の社会課題を解決している。

学生、大学、企業、研究機関、自治体、政府がそれぞれに役割を果たして連携・協働し、イノベーションを創出し、持続させ、人々が便利に豊かに快適に暮らせる社会を構築していく、この流れを短期間の内に描き切ったデザインこそ称賛に値し、お手本にすべきと思ったし、フィンランドらしい「人を真ん中にしたデザイン (H C D Human-Centered Design 人間中心設計)」思考が根付いているからこそその成果なのだろうと思った。人口が数少ない国だからとの意識も高く、国内の産学官連携は当然のこととして、海外の産学官まで取り込もうとする姿勢も見習いたい。

折しも佐賀県では県立大学構想が先の知事選によって打ち出されたが、地域の課題解決の為にイノベーションを生み出す仕組みや、企業や研究機関や投資家を広く巻き込みながら実践的に人材を成長させる仕組みが既に成り立っている大学から知見を得られた意義は大きく、生かしてほしいと願う。

## **2. 訪問先：ICEYE（10月18日（火）15:00～17:00）**

小型の SAR 衛星（レーダー衛星）の開発、製造、運用、衛星画像の活用サービス提供を行っているベンチャー企業 ICEYE を訪問した。SAR 衛星としては、民間最多の 21 機打ち上げを行っている。

ここでは、オフィス内を案内してもらい、実物の SAR 衛星が紹介された。

また、東京海上日動と提携して実施している、災害対策（主に洪水対策）に衛星画像を活用するサービスについての説明があった。

### **説明概要**

- SAR 衛星は今までの光学衛星と異なり、地上の対象物に電波を照射し、その跳ね返りを捉えることで状況を観測するため、光学衛星では困難だった夜間や曇りの日でも地表を写すことが可能である。一方で、SAR 衛星で写した画像は専門的な解析をしなければ、何が起きているか分かりにくいといった弱点がある。ICEYE では、その解析まで一貫して自社で行っている。
- 21 機の衛星を使って撮影をしており、他社と比べて高頻度の撮影を行えるメリットがある。
- 災害対応（洪水対応）として、どこで洪水が起こりそうか常にチェックを行っており、実際に洪水が起こりそうなときには、21 機の衛星を用いて解析を行っている。

実際の分析例として、静岡県に台風 15 号が接近した際は、SAR 衛星で 9 月 24 日の発災の前後に 3 枚の画像をとり、そこから 19 時間後に第一報の分析を静岡県に届け、そこから更に 27 時間後に第二報を届けた。顧客との取り決めとして、発災後、必要なデータを取り込んだあと 24 時間以内に第一報を報告し、48 時間以内に第二報を報告するという取り決めがあるが、そのタイムラインが非常に早いというのが ICEYE の特徴である。

- 静岡県からは、48 時間以内に画像を提供できていること、また、リクエストなしに画像を提供していることを非常に評価いただいている。
- 衛星画像の精度を確認するため、現在、東京海上日動と連携し、発災後の保険手続きのために取得した画像データを提供していただき、照合作業を行

っている。この照合結果をもとに、衛星画像の精度をさらに上げる取組みを実施している。

#### 質疑応答

- ・ 佐賀県として災害対策に関しては「初動」を意識しているが、発災後、24時間以内の画像データ提供は、災害対策にどのように生かせるか。

→ 現時点では、災害等の「予報」が可能となるよう解析中であるが、日本の法律上、民間企業の予報業務に対して許可制度が設けてあり、ハードルが高い。

(ICEYE より)



## 所 感

アールト大学の敷地を取り囲むように企業が立地していて、企業との距離感が近いのがエスポー市の特徴だが、スタートアップ企業の中には大学構内の旧校舎を本社として使っているところがある。ICEYE（アイサイ）もその一つであるが、構内を歩いて向かう道中、ロボットがトコトコと進む姿を見かけた。注文を受けて自動で売店から物を買って、指定場所まで運んでいるとのこと。これは非常に心躍る体験で、例えば、大学の空き教室を小学校の校舎建て替え時の代替教室として使う School as a Service ような取組みの際に、構内でこのような光景を目にした子どもたちが大いに刺激を受けると共に、アールト大学への興味が湧き、自然とアールト大学進学を目指す流れが出来ることも肌で感じられた。

ICEYE では撮影は NG だったが、アールト大学を卒業された CEO の Rafal Modrzewski（ラファル・モドルゼフスキ）さん自ら社内をご案内下さり、人工衛星の製造現場を見せていただいた。若き CEO のフットワークの軽さを感じると共に、窓から湖を一望出来るロケーションに建つ社屋には、カフェスペースや団欒のスペースがあり、ストレスなく快適に仕事をする環境となっており、ここでも人を真ん中にしたデザイン思考が見受けられた。若き社員の皆さんはいずれもカジュアルな格好で、こちらもノンストレスである。

社内を見学させてもらった後は、知事以下 10 人程で ICEYE の小型衛星の佐賀県での活用について意見交換した。この小型衛星は、エコーのような仕組みで映像を提供するので、ヘリが飛ばず撮影出来ない悪天候の災害発生時に強みを発揮する。家屋や農業被害の特定、算定の迅速化を得意とする為、各国政府や保険会社とのコラボも多いが、現状、佐賀県の大事な役目である災害時の人命救助のための初動の判断に生かすには、解析にかかる時間がネックとなる為、今後の改良が待たれるとの結論に至った。

ICEYE は2020年から2021年の収益成長率は400%。佐賀県の使節団に対して、視察の説明以上に、ICEYEが提供できる情報のどこが足りないのか、何を欲し



ているのか、佐賀県を相手に本気でビジネスをしようとされるCEOの姿にベンチャー企業のスピード感、熱気を肌で感じる時間となった。

合わせて、問題解決への熱意やプレゼン能力、交渉能力に足る人材を育てていかなければならないと、これからの時代の人材育成や教育のゴール地点を見せてもらった思いがし、バックキャストでここに至る教育のあり方などを考えていきたいと思った。

### **3. 佐賀県フィンランド交流大使委嘱式(10月18日(火) 18:00 ~ 18:10)**

・場 所：宿泊ホテル (Original Sokos Hotel Presidentti 内) CARL GUSTAF

・概 要

これまで佐賀県とフィンランドとの交流・連携の推進にご尽力をいただいたペッカ・オルパナ前駐日フィンランド大使に対し、交流・連携関係の今後の更なる発展にご協力いただくため、山口知事が佐賀県フィンランド交流大使の委嘱を行った。



#### 4. 佐賀県主催フィンランド使節団夕食会(10月18日(火) 18:10～ 20:00)

・場 所：宿泊ホテル (Original Sokos Hotel Presidentti 内) CARL GUSTAF

・概 要

- ① 佐賀県知事挨拶
- ② 駐フィンランド日本国特命全権大使 挨拶
- ③ フィンランド使節団の紹介 (江副政策総括監)
- ④ 江口議員より乾杯の挨拶
- ⑤ 一ノ瀬議員より締めめの挨拶



## 所 感

フィンランドと佐賀の交流は2017年に遡る。フィンランドが佐賀を東京2020のキャンプ地に決定したことから始まるが、その際、オルパナ駐日大使が佐賀をとてとても気に入って下さり、ご夫妻で数回足をお運び下さった。この方の招聘で今回の視察は実現している。

フィンランドにお戻りになったオルパナさんに委嘱状をお渡しし、佐賀の交流大使になっていただくというのが目的の一つだったので、無事セレモニーが執り行われたことにホッと胸を撫で下ろした。

物静かで穏やかな笑みを浮かべるオルパナ交流大使にインタビューさせていただくと佐賀での思い出が次々と語られる。バルーンや唐津くんち他、焼き物はもちろん和紙などもとても良かったとおっしゃる。また佐賀とフィンランドの親和性について伺うと

- ・焼き物などの伝統工芸品があること
- ・未来志向であること

・フィーリングが近い、心が近いこと と述べられた。そして何より佐賀に来ると言葉では言い表せない喜びを感じ、リラックス出来るとのこと。東京を中心に生活されていた駐日大使時代に、佐賀に来ると母国を思い出され、喜びが胸いっぱい広がる、そんな姿が目に見えようような話しぶりであった。

フランス、アルジェニア、イギリス、ニューヨーク、南アフリカ、ペルー、セルビアなど各国に駐在された大使からお褒めいただき、改めて世界に通じる魅力を佐賀が内包していることを実感した。

夕食会には藤村和広駐フィンランド日本国特命大使や三浦篤駐フィンランド日本国大使館一等書記官はじめ、翌日の視察先となるフィスカルス村のコーディネートをお願いしているMatleenaさんなど可能な限りお声かけしてお揃いいただいていたとのことだったが、皆とてもお喜びで、これが功を奏して翌日の視察では予定外の大物にお会いできるという幸運に恵まれた。オルパナさんも来佐の折の佐賀県のおもてなしに大層満足されていたが、こうした佐賀県の心

遣いのある対応が一人ひとりと濃い関係性を築き、絆を深め、新たな展開を呼び込む大いなる原動力になっていることをつくづく感じた。

僭越ながら夕食会の締めのご挨拶をさせていただいた。何と言っても世界幸福度ランキング1位のフィンランドと都道府県幸福度ランキング7位の佐賀県。フィンランドと佐賀県の絆がさらに強くなり、たくさんの幸せを生み出していくことを願ってご挨拶させていただいた。佐賀県にもフィンランドフェアの際、ムーミンが来てくれ、撮影会では家族連れの長い列が出来ていたことがあるが、ムーミンの関係者も招かれていたので、私のムーミン愛も織り交ぜながらお話させてもらった。最後は…キートス！と言い合って解散したが、この先の佐賀県とフィンランドの絆がさらに実っていくことを予感させる和やかさだった。

## 5. 訪問先: フィスカルスにある工房等(10月19日(水) 10:00 ~ 17:00)

フィンランドの首都ヘルシンキから西へ約 85 kmの場所にある、人口 600 人ほどのフィスカルス村を訪問した。

フィスカルス村は、かつて工業地帯としてフィスカルス社の製鉄所を中心に栄えていたが、1977 年にフィスカルス社の工場がアメリカへ移転したことにより、廃村に追い込まれた。しかし、1989 年に、美しい自然に囲まれた環境と歴史的建造物に目を付けた数人のアーティストたちがフィスカルス村に移住し、古い建物を改装してアトリエやギャラリー、ショップを作ったことで、新たに「デザイン村」として脚光を浴びることとなった。

川岸に立つ学校や工場跡が博物館やギャラリー、アトリエやカフェなどに生まれ変わり、大量生産ではない、フィンランドらしい手作りのデザイン作品がフィスカルス村で生まれていた。

### ○NIKARI 社

家具職人カリ・ヴィルタネンが 1967 年に設立した家具メーカーを訪問。

NIKARI 社は、50 年以上にわたり、フィンランドの近代文化である木工と家具製作に先駆的役割を果たしている。

また、NIKARI 社はサステナビリティ（持続可能性）をキーワードに、地域の資源を効率的に活用し、それを無駄なく循環させることを当然のように経営に組み込む企業であった。その多くの製品は本社のあるフィスカルスの森の木を中心に制作され、それと同時に森を守るための植林活動も行っている。また本社の動力は隣の川を活用した小水力発電から供給され、その先進的な取組みは国内外から注目を浴びている。



○Kain Widnas home studio (アトリエ兼自宅)

多種多様な陶芸を数多く生み出していることで著名な陶芸家Kain氏のアトリエ兼自宅を訪問。



○工房 (Kim SIMONSSON 氏)

独自の技法により、緑豊かな自然環境に溶け込むような“Moss People”と呼ばれるフィギュアを作成している Kim SIMONSSON 氏の工房を訪問。



○工房 (Atte Pylvanainen 氏)

木を使った家具を作成している Atte Pylvanainen 氏の工房を訪問。





## 所 感

ヘルシンキから1時間ほどバスで移動。一面、北海道を思わせるような大自然の中を走り、フィスルス村に到着。森と湖が広がり、舗装していない田舎道。キラキラと日が差して、ゆったりと時が流れる、小さく可愛らしい村という印象だった。この素晴らしい自然環境があればこそ、一時代を築いた製鉄業が廃れた時、この静かな村をなんとか盛り上げようとアーティストが立ち上がったのだろうと思われた。今や住民600人に対してアーティストやデザイナーは約140人で、待ちが出るほど。展示会が開かれる夏を中心に、世界中から年間10万人が訪れると言われている。

村の中心にあるのがONOMAというギャラリーショップ。ONOMAとは「自分たちのもの」という意味で、古い歴史的な建物をいかしてお店にしたり、それぞれ工房を構えたりしているアーティストやデザイナー、職人が、ジャンルを超えて独自の協同組合を組織している。だからこそONOMAとして村が一体となって定期的に展覧会を開催し、アートやクラフト作品を国内外に発表出来ている。ONOMAの存在がとても大きいと思った。

幾つかの工房を回ったが、アーティストの皆さんが、センスある作品を見せてくれ、作品に込めた思いを語ってくれ、作業風景も見せてくれる。ワクワクするような時間だった。感心したのがどのアーティストも説明を厭わず、丁寧に質問にも答えてくれること。「これはパリで飾ったものだよ」「これは誰々とコラボしたものだよ」と展示した際の写真や巨大な作品を気軽に見せてくれ、世界的に活躍していることが分かった。田舎の村でありながら、デザイン性があり、センス溢れる作品に出会えることは、人間の心や生命を満たす2つの喜びを内包しているようで大きな魅力だと感じた。

サステナビリティの意識も高く、小水力発電で自社の発電を賄う会社もある他、素材にも製法にもまたパッケージや輸送の方法についても持続可能な社会をいかに構築していくか、環境への配慮を随所に感じ、これからの時代を実感

出来た。

前日の晚餐会に ONOMA の主要メンバーをご招待したことが功を奏して、ミラクルが。アーティスト村の礎を築いた伝説の男、人気の家具ブランド「NIKARI」の創設者で、最も有名な家具職人の1人、KARI VIRTANEN (カリ・ヴィルタネン)さんが現れたのだ。まさにフィンランド・デザイン分野の第一人者、そのデザインは国内外から高い評価を得ており、つい先日もフィンランドで最も重要なデザイン賞の一つ「カイ・フランク賞 2022」を受賞した人物だ。今から30年前、空いている物件の鍵を直接渡す勢いでアーティストを集めて行ったのがこの方。この方がデザインした家具は図書館、美術館など至る所で使われていて、この方とコラボしたいとこの村に来る方も多い実力者。家具職人の暮らしを見たいかと、私達のバスを先導してご案内下さり、ご自宅、工房、サウナなど全て見せて下さり、こうした距離感の近さやおもてなしの温かさは佐賀の人々も似通ったところがあるように思った。

この村の自然豊かなゆったりとした光景は、目を瞑って開けば、ここは三瀬？富士？相知？有田？と佐賀の各地が思い浮かぶ程、似通っている。外を見ることで、佐賀の持つ魅力や可能性に改めて気付かされる時間となった。

## 6. 訪問先：Oodi（ヘルシンキ中央図書館）

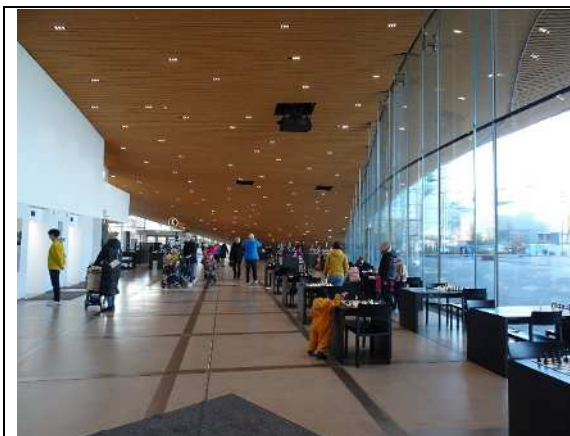
（10月20日（木） 10:00 ～ 11:00）

フィンランド独立 100 周年記念事業の最大のプロジェクトとして、2018 年にオープンした Oodi（ヘルシンキ中央図書館）を訪問した。通常の図書館として機能するだけでなく、ゲーム機や 3D プリンター、楽器の貸し出しも行っており、一般的な図書館の枠組みを超えた図書館となっていた。

約 10 万冊の蔵書が貯蔵され、雑誌・映画・楽譜等の貸し出しが行われているほか、カフェスペースや楽器の演奏が行える複数のスタジオが用意され、ミシンなどが置かれた作業スペースもあった。

また、フィンランドでは、図書の借りられた数に応じて、印税が入る仕組みとなっており、フィンランドの図書館利用率は世界で一番となっているとのことだった。

○以下、Oodi（ヘルシンキ中央図書館）内



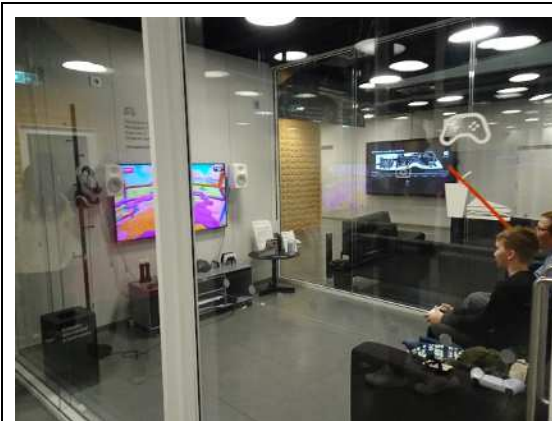
1階フロアには、カフェやチェスが置いてあり、気軽に立ち寄りやすい雰囲気が広がっていた。



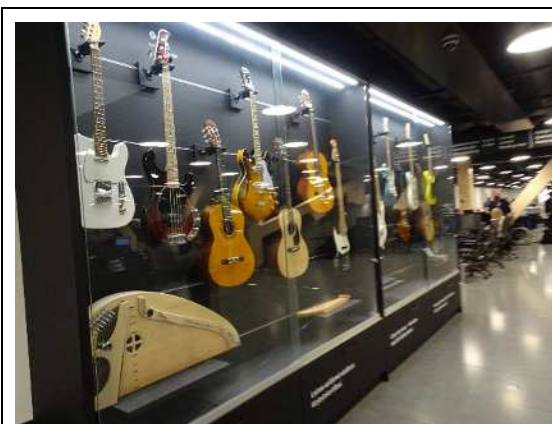
ジェンダーレスな男女共用のトイレ。手洗い場は、背が高い人、低い人、子ども誰もが使いやすいように工夫されていた。



螺旋階段の壁には、「内向的な人」、「お酒が好きな人」、「怠惰な人」、「サウナ好きな人」など様々な“人”の言葉が書かれている。Oodiの「全ての人」のためにある図書館、というコンセプトが感じられるデザインとなっていた。



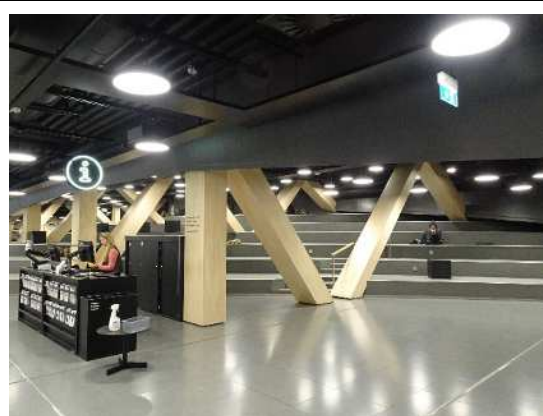
予約をすれば、誰もが利用可能なゲームルーム（左）とキッチン（右）。



楽器や3Dプリンターの利用も可能となっていた。



3階奥には、滑り台が置いてあったり、個室でベビーマッサージ教室が行われていたりなど、小さな子どもでも楽しめる空間になっていた。



訪れた人が居心地の良い空間で、リラックスしながら本を楽しまれたり、仕事や勉強をされたり、思い思いに過ごされていた。



## 所 感

フィンランドが独立 100 周年の記念として国家プロジェクトとして EU などからの助成金で建てたヘルシンキ中央図書館オーディ。国際図書館連盟 (IFLA) 主催の「2019 年公共図書館アワード (2019 Public Library of the Year Award)」を受賞したこともあり、とても楽しみにしていたが、橋のような構造体で柱のない広い空間は流線型が美しく、外観でも惹きつけられた。

国会議事堂の真向かいに建てられており、3 階のバルコニーに出ると国会議事堂の入り口と目線の高さが同じになり、まさに対峙する形になる。これは民主主義の象徴として図書館が建設されたことを意味していて、言論の自由、表現の自由を政府が保障し、均等な教育、知識や文化に触れる機会をすべての市民に約束していることが表現されているとのこと。フィンランドでは、政治と同じぐらい学びが重要であると考えられているからこそその配置であるが、全てがデザイン思考で、須くメッセージと共にデザインに落とし込まれていることに感激した。

みんながハッピーになれる図書館、街のリビングルームというコンセプトで公民館と図書館をミックスした機能を持ち、ゲームを持ってない子もギターを持ってない人も、ミシンも 3D コピー機もここで自由に使えると、無いものは無いくらい充実した機能だった。長い冬、読書に勤しむ人が多いという環境によるものだけでなく、人口が少ないフィンランドが、いかに人材の育成に力を入れているかが示されていた。図書館利用率世界 1。この図書館が出来たことが刺激となって、周囲の図書館の利用率も上がったというのも頷けた。

従来の図書館の域を遥かに超えた機能性を有していたが、目にすると、図書館の持つ存在意義はもっと自由にそこに住む人々のニーズに合わせてデザインされるべきだと改めて感じたし、図書館の持つ可能性は無限大に広がることを感じた。一言で言えば、新しい県立図書館が欲しくなる、そんな時間となった。

## ■ 県政への反映について

県政への反映について語る前に、今回、ウクライナ情勢が心配される中でフィンランド使節団が生まれ、知事以下13人が無事、有意義な視察ができたことは関係者の皆様の多大なるご尽力の賜物と心から感謝を述べさせていただきたい。使節団には次世代リーダーということで県内各地の民間各業界から若手メンバー9人が選出された。フィンランド滞在中に刺激を受けたメンバーからは我が町、我が業界での展望が語られ、帰国後にはコラボレーションが芽生えそうな気配があった。まずもって使節団メンバーによる自発のまちづくりや業界の盛り上げの取り組みが進むように後押しをすることで、佐賀県の発展に繋がりたいと思う。

さて、今回の視察で得た知見を県政へ反映させる時、各施策全般に共通するものとして2つの視点が重要だと考えている。まず1つは、危機的な現状を分析し、大きくゴールを定め、到達までの流れを描ききるデザイン力、また自前で足りない点は他の力を有機的に連携させるデザイン力だ。県政のどの分野においてもこれらのデザイン力は必須である。そのような視点で議会に提出される議案の各事業をチェックし、投じる財源や人的資源がより大きい成果に結びつくよう議員としての務めを果たしたいと思う。

もう1点は持続可能性、サステイナブルという考え方である。環境への負荷を常に考え、環境に配慮したものであるかどうか。施策全般に渡ってこの視点も欠かせない。例えば校舎の建て替え時には当然のように代替校舎を建てるが、行政の縦割りを取り払い柔軟に考えると、今空いている建物を使ってもよく、そのことが環境への負荷を軽くするのみならず意外な人的交流を生み出すことがある。通学方法の安全性など諸問題が取り沙汰されることもあるが、先進例があることを踏まえ、解決への道筋をポジティブに探る姿勢が欠かせないと思う。そのようなチャレンジングな施策が提案出来るようになりたい。

今回の視察で、私が特に注力していきたいと思った分野は3つある。1つ目は

人材の育成である。佐賀での人材育成はもっと佐賀の未来を見据えたものにするべきと痛感した。大きい企業が少ないことから起業家マインドの醸成が必要だし、構想力、発信力、交渉力、情熱を持った人材の育成には小さい頃からの教育が欠かせない。子ども達がもっと社会や大学と関わり刺激を受けられるような環境が必要だと思う。県立大学構想に関する議論も始まると思うが、佐賀の教育が、これからの社会が求める人材輩出のための教育たり得ているのか注意深く問うていきたい。

2つ目は、佐賀県が内包する魅力の気付き、そして発信と活用である。佐賀のゆったりとした自然の豊かさ、人々の距離感の近さ、温かさは何にも変えがたい魅力だと改めて実感した。オルパナ前駐日大使が佐賀の魅力を大変高く評価して下さっているのも、佐賀県が人々が健やかに心豊かに暮らすための環境や文化、伝統に恵まれているからと言える。お話を伺って「ウェルビーイングに恵まれた佐賀県」というフレーズに集約できるのではと思った。それは日常の暮らしの中にあるので、取り立てて気付かず、見落としがちであるが、人間らしく健やかに命いっぱい生きるためにあったらいいなと思うものが佐賀県には豊かにある、と気付かされた。と同時に、フィンランドでは、廃村となったフィスカルス村の再建の為、アーティスト達が立ち上がったが、社会課題の解決に向けて地元愛を注ぎ行動していくことも命いっぱい生きる実感を手にすることになるとさえ思えた。こうして考えると佐賀県には全てのものに豊かに恵まれている。

また私は、滞在したホテルから15分のところに佐賀県出身の友人が住んでおり、現地の様子を聞くことが出来たが、ゆったりとした自然が手近にある子育て環境の良さがフィンランドと佐賀に共通することだと感じた。お金をかけずとも豊かな自然の中でクタクタになるまで遊ばせられるという佐賀の子育て環境はとても魅力的で、移住の決め手となることが多いと聞く。佐賀ではごく当たり前のことが大きな訴求力を持つ。子育て環境はウェルビーイングに恵まれた佐賀県の良さの一つだろう。さらに磨き上げ、そして発信していくことも提案していきたいと改めて思ったところである。

今回は心身ともに健やかに生きるというウェルビーイング視点から佐賀の魅力を再認識したが、今後も外の視点から佐賀を見てもらい、言葉にしてもらうこ



とは大事なことだ。そして、それが佐賀の人々が佐賀を誇りに思い、佐賀の魅力をポジティブに見出し、発信し、盛り上げようとの意識に繋がる好循環が生まれるよう、活動していきたいと思う。

3つ目は、フィンランドとの交流の継続である。先日開かれたフィンランドフェアには多くの人々が訪れた。今回は福岡県からの来訪者も増えたと聞く。フィンランドについて学ぼうとテーマごとに開かれたトークセッションには、使節団のメンバーも登壇していたが、幅広い年齢層の人が聴講し、真摯に質問をしていた。若い母親達が赤ちゃん連れて参加している姿も印象的で、老若男女、多くの人を惹きつけるフィンランドの魅力を改めて思った。幸福度5年連続世界一、ワークライフバランス世界一、ジェンダーギャップ指数第2位のフィンランドの生き方や働き方、教育や起業支援、子育て支援、サステイナブルな社会づくり、サウナ文化、これから目指すべき社会のヒントを得ようと今、フィンランドへ向ける視線は熱い。またフィンランドとの親和性から語ると佐賀の魅力も理解されやすく、引き立つ。フィンランドフェアは県内外の人を惹きつける観光コンテンツに育つ可能性が非常に大きい。フィンランドとの交流の中で様々な切り口を見つけ、大きく育って行って欲しいと願っており、何をゴールにしているのか、費用対効果がどうなのか等、より良いものになるようにチェックを怠らず、議論させていただきたいと思っている。

最後に、これから県政の発展は、佐賀県で暮らす幸福度の高さをどう見える化するにかかっていると思う。今後、フィンランドの日本大使館に県職員を出向させるなど、さらに関係性を深める構想があると聞くが、人を真ん中においたデザイン思考がどのように人々の幸福度も高めてきたのか、まだまだフィンランドから学んでいきたい。そして、長期的には佐賀県で暮らす人々、また短期的には旅行などで佐賀で過ごす人々の幸福度が上がるように促していくことで、今回フィンランド使節団の一員として派遣していただいた感謝に変えたいと考えている。

